雪裏の梅花只一枝

同門
平成31年3月1日
第44号
発行　梅花流師範・詠範の会
会長本間雅憲
題字　初代会長・故加藤信三師
編集者（広報部）亀谷隆道
梅花流師範・詠範の会事務局
大仙市協和　太寧寺　伊藤道人
電話（0188-96-2029）

なぜ『梅の花』？

秋田県梅花流師範・詠範の会 会長 本間雅憲

梅花流の名称は永平寺を開かれた道元禅師様、總持寺を開かれた瑩山禅師様にゆかりのある言葉から選ばれたものです。

道元禅師様の『正法眼蔵』「梅花の巻」、特に梅の花を好まれたこと、瑩山禅師様の『伝光録』中の「梅華」という言葉。これらに因み、決定されました。

曹洞宗総合研究センターから最近出された調査報告によると、創立時の時代背景にも由来のある名称だったようです。

まず昭和二十二年熊澤泰禅禅師の文章『梅花禅』の中に、

（雪裏の梅花只一枝と心華開発して三千大千世界を薫波するには、梅花の如き寒苦を経るにあらざればよく為しうるところでない。学ぶべきは梅花の精神である。慕うべきは梅花の忍耐である。）

これ以降「梅花」という言葉が曹洞宗報などにたびたび登場してます。

さらに、昭和二十四年（梅花は寒苦を経て清香を発す）

〃　（梅花は寒苦をなめて芳香を放つ）

昭和二十六年（梅花は傲然として寒風に笑う）等々です。

それぞれの言葉が厳寒を乗り越えて花開き香る梅をたたえています。戦後の米国占領下における苦しく厳しい時代をどのように生き抜いていくか模索していた中、曹洞宗布教教化の中心に梅花がありました。その時期に新たな詠讃歌の流派を立ち上げ、檀信徒を、そして新たな日本を導こうと多くの禅宗の僧侶によって語られた「梅花」が日本再建の力強い希望の言葉となっていったのではないでしょうか。

「松竹梅」はめでたいものの代表とされます。厳寒の最中にみどりを保つ松と竹。そして寒さに耐え、他に先駆けて花開く梅。すばらしい命名です。梅花流がさわやかな香気で春の希望を伝える「梅花」のような存在であってほしいと願います。

梅花流創立から六十五年が過ぎ、先人のご苦労に感謝し、なお一層梅花流の道、詠道に励みたい所存であります。

響きわたる詠讃歌」

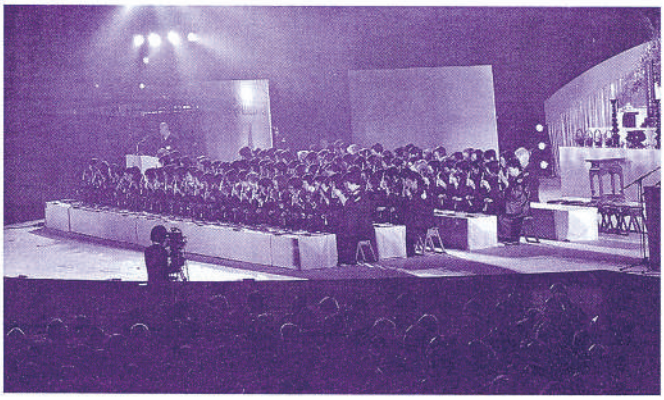
昨年の全国奉詠大会は、梅花流発祥の地である静岡県で行われました。
梅花流詠讃歌は昭和二十五年、元大本山永平寺監院職であった静岡市洞慶院丹羽仏庵老師が発願し、斯道会を作って他流派の御詠歌を研究し、詩、曲を作り曹洞宗独自の梅花流を考案して、昭和二十七年、道元禅師の七百回大遠忌の折に発足、誕生したものであり、ゆえに発祥の地とされています。
大会当日は、会場に洞慶院の梅花観音を奉安しての奉詠大会となりました。

梅花流全国奉詠大会に参加して

福寿寺梅花講員　佐藤佳子

五月二十三日から二十五日の日程で、梅花流全国奉詠大会に参加しました。

二十三日早朝米内沢駅から福寿寺講員三名と太平寺様の講員一名を乗せたバスは、各お寺の講員様方と合流しながら青森空港へ向かいました。羽田空港で秋田空港からの参加講員様方と合流し、バス二台で横浜中華街へ移動。昼食後、舘山寺温泉に向かう途中の景色は、茶畑が広がり雨の中とても緑が冴え、また、ガイドさんの説明が上手なこともあり退屈しないままにホテルへと到着しました。部屋は四名。温泉に浸かりのんびりと旅の初日を終えました。



登壇奉詠

二十四日、朝七時にホテルを出発し大会会場の草薙総合運動場体育館へ移動。到着後、秋田県からの参加者全員で記念撮影をしました。会場は、とても広く建物も立派で、静岡県のお寺様方も気持ちよく会場内へ誘導してくださいました。始まるまでの時間で、出店を見に行くことに。記念品や食べ物がたくさん並び、目移りしながら会場内に戻ると、福寿寺の登壇者が決まっていないということで私が登壇することになり、この機会はなかなか無いものと度胸を決めました。

大会が始まり、オープニングではブルース・ヒューバナー氏による尺八、駒澤大学吹奏楽部による曹洞宗歌と素晴らしい演奏に感激し、いよいよ代表登壇です。

二番目に登壇の秋田県は山形県、三重県の三県合同で『高祖承陽大師道元禅師御詠歌』をお唱えし、無事登壇奉詠することが出来て安堵しました。

梅花流発祥の地は、静岡県の古刹『洞慶院』とのことで、この県で登壇できたことは恵まれたことだと思いました。

会場を後にして清水港から土肥港へはフェリーでの移動。船の中では皆々様方大会が終わり、とてもリラックスした様子です。

梅花観音

「梅花流発祥の地に

「エガッタナェー」
～梅花流発祥の地 静岡全国大会にて～

新田寺梅花講
講長 保坂春聴

今年の梅花流全国大会は、梅花流発祥の地静岡市で五月二十三日・二十四日の両日開催されました。

新田寺梅花講員一行六人（私住職を含む）は登壇前日の二十三日に大館能代空港を出発して静岡に向かいました。その飛行機には能代市長慶寺梅花講と七日市龍泉寺梅花講の皆さんも乗っていました。

羽田空港から私たちは車で静岡市へ…

梅花流発祥の地「久住山洞慶院（とうけいいん）」様へ向かいました。静岡市の中心部から住宅街を進んでいくと、葵区羽鳥の山の麓に在りました。

駐車場の左手には四百本もの梅園が在り、二月から三月には多くの花見客で賑わうそうです。そこから一歩境内に入りますと、杉などの大木が参道の両側に林立して厳粛な禅寺を感じさせてくれます。小川を渡って進むと、「梅花流発祥の地」の石碑があり、その先に本堂等の伽藍が私たちを迎えてくれました。

予定の時刻より遅れた私たちを心配して、本堂前には御住職の丹羽義裕老師が出迎えてくれ、私たちの直前には龍泉寺の皆様が参拝されたとのことでした。

洞慶院本堂

洞慶院で記念写真

早速に、御本堂に上がり御本尊「千手千眼観世音菩薩」様にお参りし、次に静岡県梅花観音霊場第一番の梅花観音様にお参りしました。本体は大会会場にご遷座しており、ここでは実物大のお写真でした。しかしながら、御住職より梅花流創設に至る洞慶院様での歴史について御法話を拝聴し、一同思いを新たにしました。

二日目大会当日です。好天に恵まれ会場の「このはなアリーナ」は梅花服の講員さんで埋め尽くされ、当講からは金田キヨさんと小林照子さんの二名が登壇しました。お唱え終わっての感想「舞台の上でアガルようなことは無かったナーー。今回は司会の方の声がよく聞こえて、登壇作法で迷うことが無かったネーー」なんと凄い感想。その後の旅も色々と思い出いっぱいの旅になりました。

私たちもそう感じながら、西伊豆堂ヶ島温泉郷に到着。夜、気持ちに余裕ができたようで、私たちも和尚様方もカラオケや芸をして、楽しい最後の夜を過ごしました。

二十五日は帰路。下田の了仙寺ではジャスミンの花が咲き、ゆっくりした気持ちになりました。宝福寺は、お吉さんの墓で合掌。十八歳の写真がとても美しく、でも時代の流れで運命に翻弄されたと思い、私たちは良い時代に生まれたと思いました。

観光が終わり、伊東、箱根を通り羽田空港から無事二泊三日の思い出深い旅でした。

同行いただいた和尚様方、ビーエス観光の方、皆々様方にはお世話になり、忘れられない旅でした。

梅花のふるさと

～詠讃歌の生まれた風景（その二十二）～

権藤円立先生と梅花流（二）

◇戦争、そして戦後へ◇

東京・吉祥寺が新しい拠点となった権藤円立（ごんどうえんりゅう）先生（以下、敬称省略）は、大阪以来の友人である野口雨情・藤井清水とともに音楽・芸術活動を続ける一方、歌唱指導による大衆教化に活躍しました。前述の東京・埼玉各所における歌唱教育の他、昭和六年頃からは駒澤大学でも学生への音楽指導をしていました。

しかし時代は第二次大戦を迎え、仏教音楽協会をはじめ、音楽や芸術に関する活動は休止となり、権藤自身は昭和十六年、五十歳の時より肺と心臓を病み、療養生活を余儀なくされます。さらに東京吉祥寺で互いに近所に住み、親交を深めた藤井（昭和十九年三月）と野口（昭和二十年一月）が相次いで亡くなったのでした。

失意のうちに戦後を迎えた権藤でしたが、体調の回復とともに音楽活動への情熱も再び蘇ってきました。昭和二十三年に清水脩・長田恒雄等とともに日本宗教音楽協会を結成します。翌二十四年には真宗大谷派蓮如上人の御恩忌記念音楽協議員となり、二十五年には日本コロムビアから駒澤大学校歌のレコード吹き込みをしています。こうした中、藤井と野口の生前の業績を世に伝えるために、それぞれの顕彰活動を開始していました。このように親友たちとの死別を乗りこえて、精力的に諸方面の音楽活動を展開していたのでした。そしてまさにこの時期に、発足したばかりの梅花流と出逢ったのでした。

◇梅花流の活動に参加◇

梅花流は、昭和二十六年頃より曹洞宗教団として新しく御詠歌講を始めようという企画が始まり、その年の暮れには梅花流という名前が決定し、翌二十七年には最初の梅花流教典が製作され、梅花流梅花講として発足しました。それは同年に行われた道元禅師七百回大遠忌を記念してのことでした。

梅花流最初の教典『梅花流詠歌和讃教典一』、そこに収録されている曲は、紫雲・梅花・渓声・誕生・修行・入寂・修証義・法灯など、現在「伝承曲」と呼ばれているものでした。これらはすべて真言宗御詠歌の一流派である密厳流の音曲を借りて、そこに曹洞宗の歌詞を載せたもので、いわば密厳流御詠歌の替え歌と言うべきものでした。

この発足の翌年、権藤は梅花流の活動に加わることになります。そのきっかけを、当時梅花流が所属していた曹洞宗宗務庁社会部の書記であった小堀博道が次のように述べています。

権藤先生が梅花流に関係した因縁は昭和二十八年二月十日箱根に釈尊霊場奉詠があり、梅花流からも出席したのですが、その会場に権藤円立先生が各流の役員として出席しておりました。その帰路権藤先生と一緒になり梅花流御詠歌指導を依頼したのです。どうしてかというと権藤先生は当時駒澤大学の詠歌の指導者であったのでかげながら知っていたのです。権藤先生は会場にて自作の御詠歌を奉詠したのです。そして以後、権藤先生は梅花流の音譜を採譜し、五線譜として本部に提出して、梅花流に関係する許可を得、それをチャンスに現在に至ったのです。

（『梅花』第五号、昭和三十六年一月）

権藤がそれまで仏教音楽会で活躍し、曹洞宗立の駒澤大学とも縁のあったことから考えると、こ

権藤円立吹き込みの
駒澤大学校歌レコード

の出会いは時間の問題であったのでしょう。

この時以来、権藤は梅花流の活動に参画することになります。この年（昭和二十八年）の七月には新曲を作曲・発表し、これ以後梅花流講師を務めるようになります。また梅花流にとどまらず、権藤は曹洞宗の音楽布教に関して影響を与えました。昭和二十八年には、曹洞宗の教化資料シリーズの一つとして「聴覚による布教の仕方」（曹洞宗宗務庁教学部）という論文を発表しています。さらに昭和四十一年には、曹洞宗の声明という伝統的な仏教詠讃曲を五線譜に訳譜する仕事もしています（『昭和改訂声明軌範』曹洞宗宗務庁発行）。

それまで宗門僧侶のみで構成されていた梅花流組織に、音楽の専門家・権藤が参画する意義は大変大きかったと言えます。権藤の業績は一般音楽会でも高く評価され、特に仏教音楽の分野ではその第一人者と目されていました（昭和三十年に「仏教音楽」『現代仏教講座』を発表）。

権藤円立胸像（宮崎県・光勝寺境内）

いま一度、権藤の作曲した梅花流詠讃歌を発表年次順にあげてみましょう。

昭和二十八年　**三宝和讃・無常和讃**
昭和二十九年　**月影・浄心・供華**
昭和三十年　**正法和讃**
昭和三十三年　**観世音菩薩讃仰和讃・慈光・高嶺**
昭和三十四年　**聖号・不滅**
昭和三十八年　**成道和讃**
昭和四十四年　**三宝讃歌**（没後の発表）

権藤以外の作曲者によるものは、昭和三十年の安田博道「花供養和讃」・横川良延「歓喜」が初めてで、その後に他の作曲者が続くことになります。つまり昭和二十七年に真言宗御詠歌をもとに始まった梅花流は、昭和三十年までの間、権藤の作曲だけが曹洞宗独自の詠讃歌だったのです。権藤メロディをそのレパートリーに加えることによって、梅花流は独自の路線を歩み始めたと言うことができるでしょう。

梅花流に多くの足跡を残した権藤ですが、権藤自身が梅花流に関してどんな考えを持っていたのか、それを知る資料はあまり多くありません。以下は仏教音楽に関する権藤の文章ですが、梅花流にも通じるものと思われます。

従来の仏教音楽は、歌詞だけは立派な仏讃の詞章であっても、これに伴う音楽が仏教の香りの乏しいものが多い。仏教音楽が仏教の中から生まれ、何人にも仏教の味を自然に感知されるようなものでなくてはならない。そのような理想的なものはなかなか出来難いのである。（中略）要は音楽にたずさわる者がもっともっと仏教を理解し更にその教理に徹し、信仰を得るまでに至ったなら、そしてここから歌い出したなら先ず申し分はないわけである。（「仏教音楽」昭和三十年）

権藤が浄土真宗寺院の生まれであることはすでに述べた通りですが、それはたんに出自がそうだと言うだけではなく、権藤自身、敬けんな仏教徒であったことを認めていたようです。そして音楽においても仏教への信仰がなによりも大切であると考えていたことがこの文章でよくわかるでしょう。

権藤は昭和四十三年十月に亡くなります。権藤と野口雨情の顕彰活動（雨情会）をともにしていた内山憲尚の文章を次に紹介します。

十月二十日午後電話があって「昨夜十一時に権藤円立さんがなくなりました」とのことでおどろいた。師は本年七十七歳である。七十七歳とは見えない、いつも元気な顔を見せてくれたが、四、五日の風邪で急になくなったそうな。（中略）宮崎県人らしい落ち着いた性格、真剣にものに取り組む人柄、先輩として「雨情会」を守り育てて立派に発展させられた努力、報恩感謝の仏教思想を実践されたものである。

権藤はたんに音楽の専門家だったのではなく、熱心な仏教信仰者であり、優れた人格者でありました。誕生間もない梅花流は、よき指導者を得たと言えるのです。いまでも名曲と言われる権藤メロディの数々、その練習とともに、権藤円立先生の人柄を偲んでみてはどうでしょう。

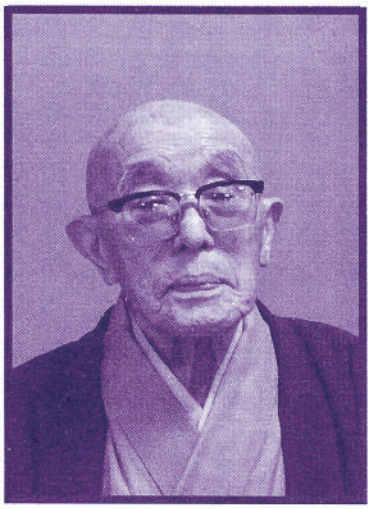
追悼 佐藤道機老師逝く

去る平成二十八年十二月に由利本荘市泉流寺東堂佐藤道機老師が遷化なされました。柴田弘一師範老師より早々に追悼文を頂いたのですが、本誌発行が遅々となって出せず大変なご迷惑をお掛けしました。大祥忌も過ぎての掲載となりましたが、改めて佐藤道機老師のご功労に感謝し哀悼の意を表します。

東泉寺
柴田弘一

秋田県の梅花流発展に大きな力を注いで下さった佐藤道機老師が遷化された。師は由利本荘市泉流寺東堂として満九十二歳、昨年十二月八日、成道会の日、そして奥様の誕生日に大寂定中に向かわれた。

師は県梅花流の草分け的存在のお一人であり、同市の恵林寺、本間真英老師、秋田市雄和の相川寺、丹生純雄老師、北秋田市の龍泉寺、佐藤芳雄老師、大館の宗福寺、加藤信三老師、同市の全應寺、佐藤仁凰老師等、各老師と共々に梅花を広める為に尽瘁された。



佐藤道機老師

長い間の御労苦を思い。感謝の念、一入である。鬼籍に入られた諸老師の思いを受け継ぐ責務を感じる昨今である。

さて、佐藤道機老師は「声明や法式」の大家として知らぬ者は無く、御本師である佐藤道観老師（昭和改訂「声明規範」の編集者の一人＝宗務庁発行）の元で研鑽を積まれた。

その独特の声と節回しに強烈に感動した事を覚えている。

梅花一泊講習会の夜は、当時若かった私達に別講座で「声明」の指導をして下さり歎仏会の「散華の偈」「仏名」「七仏宝号」など、節や声の出し方の点検はダメ出しの中で延々と続けられ、そんな夜の講習も今は懐かしく、大先輩老師方と懇親を深めることが出来た絶好の機会でありその中心におられるのはいつも道機老師であった。細やかな御指導を頂きながら、今もって意に添えないでいる自分が情けない思いである。

以前、県の梅花奉詠大会と検定会、講習会は収支も全て師範会が仕切っていた。しかし奉詠大会、検定会は本来宗務所主催なのであり、収支も宗務所の役割の中でなされるものであることを述べられた道機老師は、一つの提案をされ、宗務所が主催する原則のもと、師範会（現、師範・詠範の会）には七万円の補助金を支出する、というものだった。その言葉で皆が納得し決したのである。

当時の宗務所長清水忠道老師は、道機老師のお言葉を、今もはっきりとありがたい思いで記憶している、とおっしゃっていた。

今も声明を唱えながらおられる佐藤道機老師の大寂定中、安からん事を心から念じつつ。

佐藤道機老師ご葬儀

ちょっとぶじょほう ～梅花つれづれ～

梅花の道

十一教区
長年寺 副住職
松井祐司

今度、宗務所で梅花流指導者養成所というのが開かれるから、参加してみないか…

青年会や勉強会といったものにあまり積極的ではない自分でしたが、その一言に背中を押していただき、私にとって、深く楽しく悩ましい梅花流との日々が始まりました。

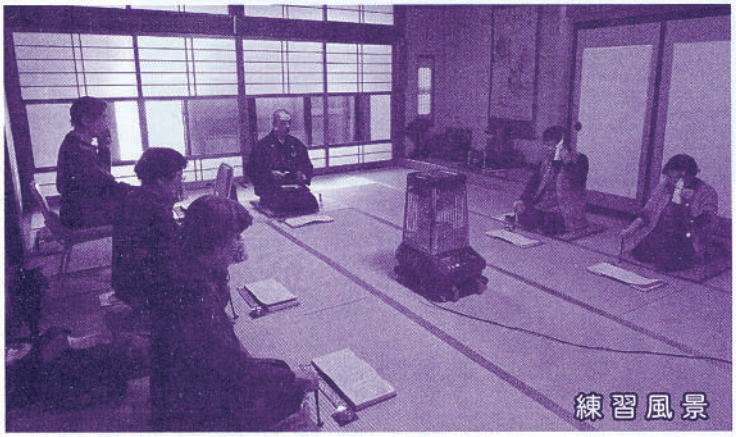
それまで梅花はまったく触れることも習うこともなく、法具という言葉すら分からず、もちろん扱ったこともない、大丈夫だろうか…不安しかない心持ちで梅花流指導者養成所一期生として、入所させていただきました。

開所式と顔合わせの日、曹洞宗秋田県宗務所に行くのも始めてというような状態で、鹿角市～秋田市間がこんなに遠かったのかと改めての驚きとともに、二時間半かけてようやく到着、疲れと緊張のためか、今写真を見返すと顔がひきつっています。

毎月一度の講習を重ねて、少しずつ緊張もとれ仲間も増え、お唱えできる曲も増えていき、先生方の優しくも厳しいご指導に導かれて、初心者クラス→上級クラス→研修クラスと一歩一歩。物覚えが悪く、亀のようにゆっくりですが、梅花流の道を進ませていただきました。

そんなある日、今度は宗務庁の梅花流指導者養成所に行ってみないか…そんな有り難い声がかかりました。とても嬉しかったのと同時に、自分でいいのか、自分より上手な人は沢山いるのに…という気持ちの方が大きかったのを覚えています。

ですが、せっかくいただいたこのご縁、仏様のお導きと思い、宗務庁梅花流指導者養成所二十一期生として入所させていただきました。



練習風景

東京都港区にある曹洞宗宗務庁は行くのはもちろん初めてで、最初に秋田県宗務所にお伺いした時以上の緊張感で、前日は眠れませんでした。

宗務庁梅花流指導者養成所の入所期間は二年、年に三回講習が有り、一回の講習は五日間の日程で行われます。午前五時半から午後八時までひたすら梅花、全国から選ばれた猛者（？）が集い、同じ釜の飯を食べ切磋琢磨精進する日々は何より得がたい経験となりました。

そして、今も変わらず梅花を続けさせていただいています。いえ、変わったことが一つ、今まで習う生徒の立場から、今度は指導する先生の端くれとして、梅花講員さんの前に立つ機会をいただけるようになったことです。

人に教える、伝えるということはとても難しく、毎回反省することばかりで、今まで導いて下さった先生方の偉大さを改めて感じる日々です。

自分の梅花との「出会いと歩み」になってしまいましたが、始めた頃の私のように、梅花流の右も左も分からない人でも、一生懸命お唱えを続けていけば少しずつ必ず出来るようになります。特に秋田県は素晴らしい先生が沢山いらっしゃいます。何より梅花を志す、かけがえのない「同行の仲間」に出会うことができます。

梅花を始めようか迷っている皆さんへ、ぜひ梅花流の世界へ一歩を踏み入れてみて下さい。私は梅花には仏様やご先祖様との距離を近づける力があると思っています。お唱えをすることによって、仏様の教えが自然と身についていきます。

梅花流の素晴らしさをもっと多くの人達に、お檀家さんに知っていただきたいという気持ちをもって、これからも、深く楽しく悩ましい梅花の道を歩んでいきたいと思います。

震災復興祈願御和讃

『平成とともに ～同行の歩み～』

平成の時代が終わりを告げようとしている。三十年続いた今上天皇は退董を示され、今年五月より新天皇が即位し、新元号のもと、新たな時代が始まる。

個人的に言うと私は昭和天皇崩御をご本山で迎えた。昭和に上山したが、平成の新年を迎えて乞暇送行した。外世界は大きく動いていたが在山修行生活に変わりはなかった。

さて遠く離れた秋田においてはこの平成元年に奇しくも、「同行」第一号が創刊された。発願した当時の会長の亀谷健樹老師は創刊号に発行の理由を記している。

第一に各師範老師の実践参究を記載記録し、横の交流を進め個人の研究とレベルアップに繋げる。

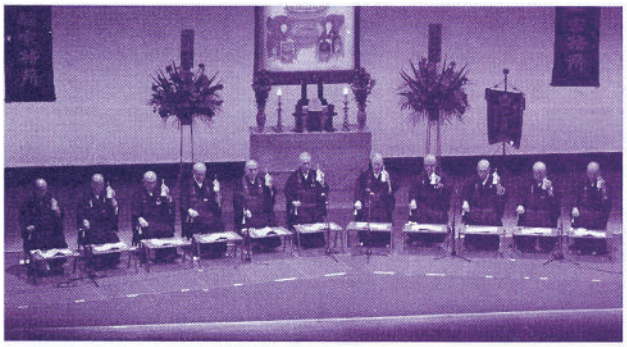
第二に秋田県での梅花流の歴史、創立からこれまでのおよそ三十年にわたる先人諸老師の実績を記録に残すべきこと。

第三に各講中からの情報交換及び、組織と事業、梅花と検定等に対する意見交換の場を設ける事。

その趣旨を実践した編集者は、梅花流の歴史や情報、各寺院講中の紹介、大会の報告、講習会の内容や感想、曲の解説、法話、検定の留意点、特別所作誌上講習、行持案内等々、ふんだんに掲載し活動を促した。

そうした各師範の梅花流敷衍活動と情熱が届き、平成十五年には悲願の秋田県に於いての「全国奉詠大会～大館樹海ドーム」初開催となった。

しかし平成の世の安寧は永く続かなかった。既に大規模災害としては七年に阪神淡路大震災があり都市崩壊と多数の犠牲者を出していたが、二十三年に東日本大震災が発生、津波と原発事故によって一万八千人余の人達が犠牲となった。当県の各寺院、青年僧侶らは篤く迅速な救援支援活動に奔走し、師範、講員らは供養の詠讃歌を唱え念じた。



激動であった平成の時代の中で、先人達が積み上げ作ってきた「同行」を休刊状態にした事を申し訳なく思う。この休刊中に行われた行事で記録して残すべきものを次に掲載する。それは二十九年の秋田県奉詠大会で披露された、「震災復興祈願御和讃」である。岩手の師範会によって作られたこの曲は、供養から復興へ希望と願いを込めて、前へ進み出す為の応援歌である。今年もまた、八回目の「3.11」を迎え、五月には熊本地震後の復興を祈る全国大会が開催される。

「心ひとつに、祈りの梅花」

今や梅花流詠讃歌は仏祖讃歎、供養を越えて、願い、希望の歌となった。平成の次の新時代に向けて私達も復興、平和、安寧の祈りを込めてお唱えし、ともに歩んで行きたいと思います。

（編集子　亀谷）

「震災復興祈願御和讃」

一
希望を抱き　想いこめ
御霊に捧ぐ　慈愛の詠讃歌
妙なるいのち　継承えんと
心ひとつに　歩み行く

二
恵みゆたかな　故郷に
もろびと願う　永久の幸福
変わらぬ日常　築かんと
絆信じて　ささえ行く

三
山坂険しき　道なれど
仏の慈悲に　導かれ
生かされ今に　掌を合わせ
心ひとつに　歩み行く